

(6)アシスト教室

矢 木 修

1. 「個別学習アシスト教室」を開設した経緯

本校は、従来より知識偏重のエリート教育をしないと明言し、完成型の中等教育を目指し中高一貫教育の実践を行ってきた。そして平成10年6月に「学校教育法の一部を改正する法律」が可決され、中高一貫による中等教育の多様化が法的に認知され、本校もこの法律に基づき併設型中学校・高等学校へと組織替えを行い、教育課程編成上の緩和を利用し、ゆとりの中で個性伸長を図り、自己確立を図る教育課程編成を行い実践している。その例として「総合人間科」「ソーシャルライフ」「選択プロジェクト」等が挙げられ、これらを学ぶことは幅広い視点で物事を思考していくことに有益である。しかし公立の併設型中高一貫校では中学校の選抜で学力検査を実施することが出来なく、各教科で幅広い学力層の生徒が入学してくることとなった。しかも生徒にとって、所謂普通教科の内容は抽象度が高くなり、現実の社会生活との関わりが分かりにくくなってきている。

こうしたことから各教科の基礎学力定着のため、学習意欲を高めるような学習方法を模索していく必要がある。一方教育学部の学生、院生にとって、教育学、教育心理学の理解を深めるため学校現場での体験をする事が大事である。これは、将来教職に就く場合は勿論、研究の面から見ても、アカデミックな世界と現実の世界との溝を埋めるためにも必要となる。そして現場での実践を通して理論の確立を図って行く姿勢が重要である。こうした附属側、学部側両方の思惑が相まって、「如何にしたら教科学習の学習意欲が高められるか」「教科学習への効果的な動機付け」を目標にした教育実践を行うため、教育学部のボランティア学部生及び教育発達科学研究科院生による、中学1、2年生の生徒に対して放課後個別に学習指導を行う「個別学習アシスト教室」を展開した。

2. 具体的方法

ボランティアチューターは学部1年生2名、3年生4名、4年生5名、研究科院生5名が、中学1年生6名、中学2年生11名を1対1で個別指導を行った。中学1年生6名は全て数学を週1回、中学2年生11名のうち2名は数学を週2回、他は英語で2名が週2回、7名が週1回の指導を受けた。対象生徒の決定は希望制で、希望者を募ったところ1、2年生とも約半数が希望したため、1年生は完全抽選で、2年生は1年次の成績を考慮し、学級担任と教科担当者として、個別学習が必要と思われる生徒を優先的に決めて対象者を決定した。内容的には、1回約1時間程度で、生徒の動機付けを高める事、生徒の学習理解を促し、学力を総合的に高め維持する事を目的とし、教科書中心の指導、チューター独自のプリント利用による指導、ヒアリングを取り入れた指導等チューターごとの様々な方法での指導で、毎回指導後に、生徒はその日の学習内容を確認しながらの学習確認紙への記述を行なわせた。また、チューターもその日の様子や次回の指導方針を指導記録紙に記述する方法をとった。

この活動では、中学校側の思惑と学生及び院生側の思惑をそれぞれ達成させるために、学校の教科担当者とチューターとの合同研究会を2回程持ち、指導の進捗状況や生徒の学習状況等について話し合い、生徒と指導者がどのように着座するのが望ましいか、生徒のタイプと指導の在り方等を検討した。それが教科担当者から学校における授業中での様子から個別学習での動機付けのヒントを得たり、逆に個別学習における様子から普通授業においての各個人へ自信を付けさせるヒントを得たりするなど効果をもたらせた。

3. 生徒の反応

前述したように、この取り組みを公表したとき、この取り組みに対する期待は大きく、約半数の生徒が希望した。希望者が多く、対象生徒を決定するのに苦慮したが、外れた生徒から「今度いつ見てもらえるようになるのか」と言われる程なので、やや学

習に遅れている生徒も少しでも現状を打破し向上したいと願っていることが伝わってきた。反面これだけ意欲があるのに、これが普段の自己学習に結びついていない矛盾を感じるが、これらの生徒は意欲はあっても学習方法そのものが分からないでつまづいていると言えよう。家庭での学習でこれを解決するとならば経済的な問題も出てくるが、学校の中で無料で制度化されれば、この制度に積極的に参加しようとする生徒は少なくないであろう。また対象になった生徒達も、殆どの生徒が、勉強の仕方が分かるようになったとか、少し自信が付いてきた等プラス効果を表明した。これも単に学校の教師が「勉強はこうやってすると良いよ」とか言ってもこれだけの効果は得られなかっただろう。やはり教え方のプロではないが歳が近い「お兄さん」「お姉さん」的なチューターから言われての効果であろう。

生徒、保護者からの反応を見ると、学習意欲向上のための教科学習一つの手段として、教師集団によるTTや習熟度別学習など挙げられるが、地域に在住する教育に関心を持つ大学生や院生をスクールボランティアとして登録し、学校で個別学習アシスト教室なるものを展開していくことで地域の教育力を高めることにもなり一石二鳥の効果が現れることが予想される。

4. 各教科からみた総括

英語：コミュニケーション活動の目標から中学2年生の英語の学習活動のみてみると、英語を通して、自分の身の回りにある人や物事を理解し表現することから、他者や自分を取り巻く物事との関係を客観的に捉え理解し表現するコミュニケーション能力を育てることへ発展させる所に主眼を置くことが出来る。そこで、中学1年生の入門基礎期に十分な英語音声化能力や言語運用能力を身に付けることが出来なかった生徒は、英語の学習を「難しい」「理解できない」「表現できない」と感じ、「日本人なんだから何故英語なんか必要か分からない」ということで学習意欲の減退に陥る。こうした中でアシスト教室では、教科書を基本に語彙、文法、英文の理解、表現力の定着に重点が置かれ、授業ノートの作成、Listeningの効果的な方略、聴覚、視覚を利用した学習、文法規則を機能的に考えさせ規則発見的な学習を、個に応じた指導していった。そして常に「褒めて伸ばす」ことを意識し、情意の面を配慮し学習の動機付けを高めていくようにした。

数学：小学校の算数では、数量や図形についての基礎的な知識と技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考える能力を育てると

ともに、数理的な処理のよさが分かり、進んで生活に生かそうとする態度を育てることを目標にしてきた。しかし、数理的な処理の仕組みが良く理解出来なかった生徒は、算数は難しいものだとし先入観を持ち、繰り返し反復する練習を怠ってきているのが現状である。そして、中学校ではさらに抽象化され、自分の生活に直結して考えることが出来なく、益々数学嫌いを増幅させている。こうした状況の中でアシスト教室では、まず基本的な計算能力を定着させるため繰り返し反復させるとか、文字式では身近な例と関連付けて考えたりするように、数学の学習の仕方を指導してきた。その時には、英語と同様に、生徒に自信を持たせることが重要で、良いところ、良い発想を褒めていくことに心掛けた。また、成績不振者の多くは、ノートの取り方が下手であったり、途中の思考過程を記録しないで頭の中だけで処理しようとする傾向がある。そこで、ノートの取り方をきちんとさせ、何処でどう間違っただかがはっきり分かるようにさせていった。

5. これからの課題と展望

この個別学習アシスト教室は、附属学校側と学部学生、研究科院生双方の思惑一致で始まったものの、予算的裏付けや制度的裏付けは全くなく今後の見通しは予想が立たない。大学との連携強化で考えれば、教育学部や教育発達科学研究科に止まらず、他の学部で教育に関心を持つ学生の協力が得られる方向で考える必要がある。大学側としては教職課程の講義の一環として学生を派遣することも考える必要がある。附属側としてはこうした学生を普通の授業でアシスタントティーチャーとして利用することも出来る。基礎学力定着のためには学校の教師の力量だけの問題にせず、抜本的な制度的改革が必要な時期でもあろう。

(文責：矢木 修)